

## 1. 「ゆら早生」の摘果作業の軽減による省力化と安定生産の推進

由良町は、「ゆら早生」を中心としたうんしゅうみかんの栽培が盛んな地域であるが、同町の園地の大半は急傾斜地にあり、管理作業の労力負担が非常に大きい。特に、摘果は夏期の高温下での作業のため、身体的な負担が大きく、省力化が課題である。また、同町の「ゆら早生」は、長年の着果負担やマルチング等の栽培管理により樹勢が低下傾向にあるため、その回復も課題である。

そこで農業水産振興課では、由良町における「ゆら早生」の着花量（初期の着果量）を適正化し、摘果作業の省力化並びに樹勢の回復につなげることを目的に、冬季に植物成長調整剤（ジベレリン2.5 ppm+マシン油乳剤80倍）を散布し、花芽の着生を抑制する技術の普及を目指して活動を行っている。

本年度は由良町三尾川地区において展示ほ（園主：数見隆一郎氏）を設置し、効果の確認を行った。処理区では令和2年12月または令和3年1月に植物成長調整剤を散布し、令和3年5月に着花量を、7月に摘果時間を調査し、無処理区と比較した。その結果、処理区では無処理区と比較して着花数、摘果時間ともに少なくなることが確認できた。園主からは「着花過多で困っている人は多いので、本技術が有用であることは間違いない。今後は、着花過多になりやすい園地を改めて選定し、収量や品質も含め実証していきたい」とのコメントがあった。

当課としても、本技術の導入条件を改めて検討し、同町の農家への普及を進めるべく、次年度以降も展示ほを設置し、活動していきたいと考えている。



無処理樹（左）および処理樹（右）の着花状況



摘果作業時間の測定